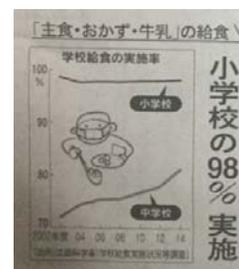
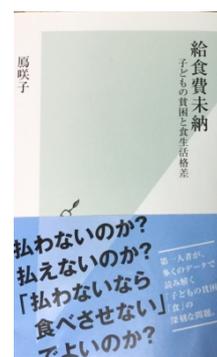


学校給食

子どもの貧困と学校給食について考えていたとき、写真の日経新聞 10月7日夕刊の記事を読んだ。日本で最初の学校給食は明治時代に山形県の私立小学校で始まった（南山大学の菅原真さんによると、庄内地方の鶴岡であり、大督寺というお寺に碑があるという）。貧困児童に無料で食事を与えるのが起源。米飯やパンなどの主食とおかず、牛乳がそろった「完全給食」を実施する小学校は約98%で、中学校で導入する自治体も増えている。



その後、先日も紹介した鷹咲子『給食費未納—子どもの貧困と食生活格差』光文社新書を書店で手にした。2015年、埼玉県北本市の中学校で給食費未納が3カ月続いた場合「給食を提供しない」ことを決定したニュースから話は始まる。表紙帯の「払わないのか？払えないのか？」といった問いかけが心にせまる。



給食で鮮明に覚えているのが、名古屋市立千種小学校のときの「脱脂粉乳」ミルク？だ。とにかく臭かった。当時、こんな不味いミルクをどうして飲まなくてはと思ったものだ。気の弱い生徒であったので、真面目に飲み干した。



『給食費未納』から一脱脂粉乳というのは、牛乳から乳脂肪分や水分を除き粉末にしたもので、食糧事情が厳しい終戦直後、各地の学校給食で出されました。写真はアメリカから船で運ばれ荷揚げされた脱脂粉乳が入ったドラム缶です。この粉を湯で煮溶かしてミルクにするのです。

わが国の学校給食は、凶作・災害・戦争・炭鉱の閉山による大規模失業など、子どもの食事を確保する必要に迫られて発展しました。なぜなら、欠食・口減らしなどの形で、困難な状況の影響を最も受けたのは、子供たちだったからです。つまり、子どもの食がおびやかされるような事態と、そのような事態から生まれる「子どもの貧困」に対応するために、学校給食が発展しました。

また、予算の制約のため、欠食児童・貧困児童という特定の子どもを選別して給食が始まったことで、対象となった子どもの気持ちをいかに傷つけないようにするかという困難な課題が生じました。選別主義は、給食の対象となる子どもに貧困児童のレッテルを貼ることになります。

学校給食は、どんな状況の子どもでも受けられる普遍的な社会保障であるべきです。給食の歴史からは、学校給食で子どもに直接食事を保障することが、子どもの食のセーフティネットであると学ぶことができます。

(2016年10月16日)